春は二度と訪れず。

ろく@おもちゃ箱

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

織斑春は織斑千冬の汚点だった。

そのイメージを払拭しようと、春は死に物狂いで努力する。

だが、千冬や兄二人は春を拒絶し、ついぞ見捨てたのだった。

――これは、裏切られた一人の少女、その二度目の死までの全てを描いた物語。

目　次

一度目の死
死という名のプロローグ ―――――――――― 1

一度目の死
死という名のプロローグ

織斑春。それは織斑千冬の汚点とされ、幼い頃から疎まれ続けた存在だ。

春は姉である千冬に迷惑をかけまいと必死に、それこそ死に物狂いで努力した。

――たとえ、周囲の人々がその努力に気づかず蔑み続けようとも。

――たとえ、肉親である兄二人から日々暴力や暴言を受け続けようとも。

それでも、春はただただ千冬という一人の人間に家族だと認めて欲しくて。

いつか、千冬が自分を認めてくれる刻が訪れると信じて。

……孤独な、哀れなる努力を続けた。

――だが、と春は思う。

だが、あの選択は間違いだった。

千冬や兄達が自分を認めることなぞ、永遠永久永劫訪れないのだ。

もし仮に、これまで続けてきた努力が報われたとしよう。

もし、報われているのなら……

――家族が誘拐された場合、真っ先に助けを求めるか、自ら助けに来るのではないだろうか。

「……チッ……駄目だ、繋がらねぇ!!」

銃と受話器片手に全身黒服の男が地団駄を踏む。

先の発言や行動からして、相当に怒り心頭のご様子だ。

「やっぱりあの噂は本当だったんですよぉ、兄貴ぃ……」

仲間と思われる、これまた全身黒服の男が言う。

その顔には不安が色濃く表されていた。

「ど、どうするんですか、兄貴。こ、このままだと、また自由を失

いますぜ？」
三人の黒服男、その最後である一人が他二人を、主に兄貴と呼ばれている男を問いただす。
その発言をきっかけにあーでもない、こーでもないと言い争いが始まった。
織斑春はその光景をぼんやりと眺めていた。
体の至るところには殴られた痕があり、両手両足には太い縄が幾重にも巻き付けられている。
傍目から見ても只事ではない状況にしかし、救助の望みは既に断たれてしまっていた。
「クソッ!!本来なら織斑千冬をおびき出すだけの簡単な仕事だったのによぉ!!」
「ま、まさか自分の名声のため、に、肉親を見捨てるなんて……」
「とにかくぅ、今はコイツをどう処理するかぁ、検討しましょうよぉ」
春を指差しそう言い放つと、男達は何やら作戦会議を始めた。
――殺される。
春は直感した。
だが不思議と負の感情は湧かず、代わりに謎の喪失感に苛まれる。
もはや怒りも悲しみもない。
あるのは絶望という名の喪失感だけ。
（……終わった……）
会議を済ませた三人が自分に銃口を向けている、そんな状況でも単調な想いしか抱けない春。
ついぞ壊れた……のかもしれない。
「……まぁあれだ、テメェには何の恨みもないが、俺達の命のために死んでくれや」
「恨むならぁ、お前を売ったぁ、兄を恨むんだなぁ!!」
春の耳に男共の声が響く。
――自分を、売った……？

そう感じたと同時、乾いた発砲音が轟き、春の意識は闇へと葬られた。